Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第412号
2021年6月号
パリ通信
第114号

「暖か」届け人

Heartot（ハートット）

この憂うつな時にも、困難にめげず壁を乗り越えようとする若者、新進気鋭の芸術家、創造力豊かな企画や発明で、世の中を明るくしてくれる若者が増えていることは、私にとってこの上なく嬉しいことです。ましてや身近にこのような前向きの若者と話せるときは心がときめきます。

6月23日、二人の若者が我が家に足を運んでくれました。心なごみ、心温まる夢を届けて頂き、私は彼らを「暖か届け人」と名づけました。数ヶ月前から文通が始まりZOOMでも話し合っていましたが対面するのは初めてであり、その才能に驚き、コンセプトと人柄の一致に魅力を感じました。彼らの思いを簡単な英語の絶妙の組合せでロゴにしています。

Heart とHotを結合してHeartot（ハートット）である。作者（maco)の言葉をそのまま引用します

Heartot（ハートット）とはHeart とHotをくっつけたmacoのオリジナルです。
1枚のイラストを手にした時、思わず微笑んでしまうような作品を描きたい。
そんな思いからHeartotの仲間たちは生まれました。
描いている言葉は、ほとんど私自身に言い聞かせている言葉でもあります。
イライラしたり、落ち込んだり、笑顔になれない時、夢をあきらめそうになった時etc。そんな時に、ニッコリ自分を励ましてくれるイラスト。
大きな力はありませんが、少しは心を和らげてくれるかな——。
肩の力を抜いて、お茶でも飲むような気分で、そっとこの本を開いてみてください。
めげそうなあなたの「心（Heart）」を「ホット（Hot)」できたらな———。
そして楽しい時もHappyがもっともっとふくらむように。

What is Heart♡t?

Heart♡t is Nemoto Maco's original bland created by combining the English words "Heart" and "Hot".
I have always wanted to create a work which will put a smile on your face when you look at its illustrations
This book was born out of this desire.
Please relax and open this book just like you are about to drink a nice cup of tea.
Then, may your drooping spirits be lifted a little and your happy smiles return.
And may your happiness grow even at your happy times.
We are always cheering for you.

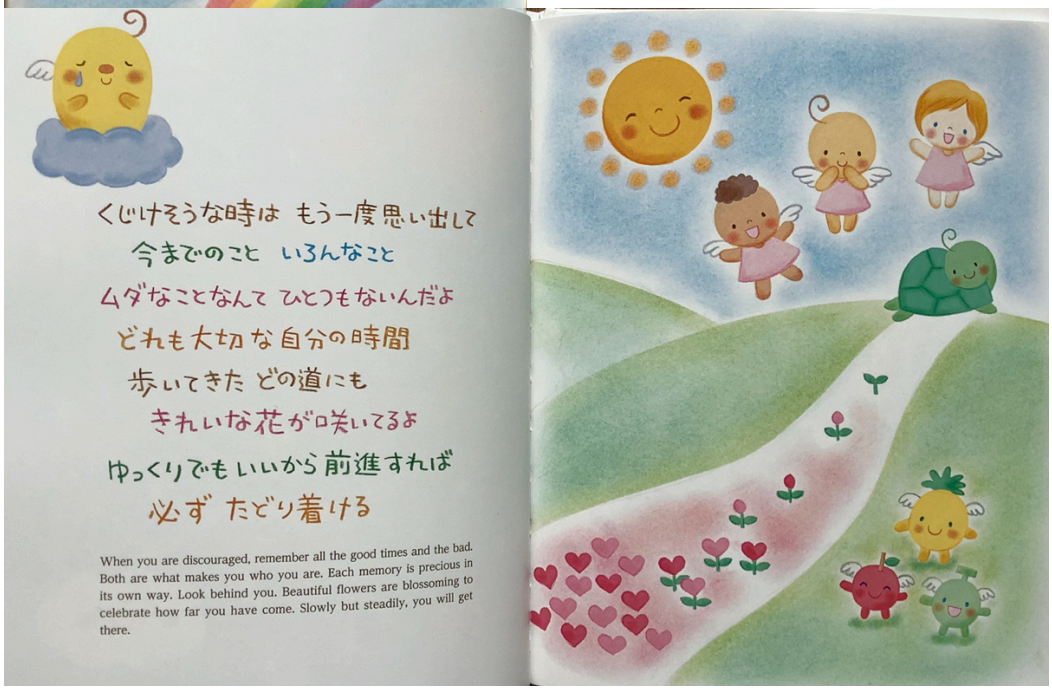
ジ

作者を紹介します。

ねもとまこ

心が思わずほっこり笑顔になれるイラストを描きたいと独学で創作に励む。
2000年オリジナルブランド「ハートット」誕生。
2006年に出版した「こころのビタミンはハートット」は紀伊国屋書店（九州）で絵本部門一位。世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群のポストカードに採用。
2018年～2019年度文部科学省認定の小学校外国語教材We Can!に掲載される。
幼稚園、保育園で配布される出席ブック全ページを担当する等、実績多数
2019年に出版したメッセージ絵本「しあわせのかくれんぼ」の絵を担当。

この「しあわせのかくれんぼ」は日本語と英語が併記されており、日常的な物語が味わい深く表現されている。その一コマを下記のサンプルページでご覧ください。近著では、幼児向けの絵本に簡単な英語も記されており、時に適った編集となっている。
英語の担当は石塚博規（北海道教育大学旭川校教授）、上田玲奈（慶応義塾大学商学部在学英検１級TOEIC990点取得）
作者は音楽にも通じ読み聞かせのバックグラウンドに癒やしのメロディーが楽しめます。
「しあわせのかくれんぼ」で検索、YouTubeでご覧ください。



今までに、沢山のイラストを見てきました。今回、私が一番感動したのは、丸い曲線が言葉にならないほどに胸に迫ってきました。理屈抜きでしたので、作者に会いたいと切望しておりました。その実現をできるだけ多くの方に知って頂きたいと思いました。
YouTubeを見るだけでも楽しめます。ホームページはwww.heartot.com

尚、７月１日から下記の童話がYouTubeでご覧頂けます。時間は１分30秒位ですから、飽きることなく、楽しめると期待しております。丁度「我が輩は猫である」を1年間かけて読んできたところに、このニュースが入り驚いています。

これは絵はがきです

6月23日・忘れてはならない日

時は人を忘却に向かわせる。しかし、人類の罪多き歴史の中で、忘れてはならない日がある。そして人にはそれぞれ忘れられない日がある。悲しいカイロスの時がある
6月23日もそのような日である。
このように「忘れてはならない日」について松山幸生先生からお話を聞いた。滝沢陽一先生からも聞いた。お二人とも召天され、語る機会も無くなったかと思っていたら、年下の教友から朝日新聞の記事を見せられた。8月15日に先立って敗戦の苦難を背負い、その後も日本の犠牲を一手に引き受けてくださっている、近しい人々も覚える。
松山幸生先生は「平和を訴える人は少数になる。その時の覚悟が出来ているかどうか、信仰が問われるときである」と諭してくださった。デモの騒乱の中でも一人静かに国会の前で祈っておられた先生のお姿が重なっている。
「忘れてはならない日」個人誌の力はないが、朝日新聞の記事を掲載して残したいと思う。

1，玉城・沖縄県知事の平和宣言要旨（朝日新聞6月24日朝刊）

玉城・沖縄県知事 平和宣言要旨

太平洋戦争最後の熾烈な地上戦が行われてから、76年目の6月23日を迎えました。

今もなお県土の各地には、犠牲になられた方々の御遺骨や多くの不発弾が埋もれており、戦争の傷は未だ癒えることがありません。県民の思いに寄り添い、国の責任において一日も早い御遺骨の収集、不発弾の処理を行っていただきたいと思います。

また、国土面積の約0・6％の沖縄県に米軍専用施設面積の約70・3％が集中し続けていることにより、騒音、環境問題、米軍関係の事件・事故が後を絶たない状況にあります。

このような中、沖縄県が来年本土復帰50年という大きな節目を迎えるに当たり、日米両政府は、県を含めた積極的な協議の場を作っていただき、辺野古新基地建設が唯一の解決策という考えにとらわれることなく、「新たな在沖米軍の整理・縮小のためのロードマップ」の作成と、目に見える形で沖縄の過重な基地負担の解消を図っていただくことを要望します。

未来を担う子どもたち、若者たちに、自然豊かな沖縄、独自の文化が息づく沖縄、平和で真に豊かな世界に誇れる沖縄を託すことが私たちの責務であります。

くぬ地球ぬ上から　有る丈ぬ戦争、無らんなすくとう。一人一人が　弥勒世（平和）願いる心気（心持ち）繋じ行ちゅるくとう。

Let us free this planet from all battles and wars/ By connecting the hearts of all those who wish for peace

犠牲になられた全てのみ霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、沖縄戦の実相と教訓を次世代に伝え続け、人類社会の平和と安寧を願い、「安全・安心で幸福が実感できる島」を目指し、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

重なりますが、全文を朝日新聞デジタル版から引用します。
沖縄では、弥勒（みるく）を平和という。知らずして恥じる。

玉城・沖縄県知事の平和宣言　　来年は本土復帰50年

太平洋戦争最後の熾烈（しれつ）な地上戦が行われてから、７６年目の６月２３日を迎えました。今もなお県土の各地には、犠牲になられた方々の御（ご）遺骨や多くの不発弾が埋もれており、戦争の傷は未（いま）だ癒えることがありません。県民の思いに寄り添い、国の責任において一日も早い御遺骨の収集、不発弾の処理を行っていただきたいと思います。

また、国土面積の約０・６％の沖縄県に米軍専用施設面積の約７０・３％が集中し続けていることにより、騒音、環境問題、米軍関係の事件・事故が後を絶たない状況にあります。

このような中、沖縄県が来年本土復帰５０年という大きな節目を迎えるに当たり、日米両政府は、県を含めた積極的な協議の場を作っていただき、辺野古新基地建設が唯一の解決策という考えにとらわれることなく、「新たな在沖米軍の整理・縮小のためのロードマップ」の作成と、目に見える形で沖縄の過重な基地負担の解消を図っていただくことを要望します。

未来を担う子どもたち、若者たちに、自然豊かな沖縄、独自の文化が息づく沖縄、平和で真に豊かな世界に誇れる沖縄を託すことが私たちの責務であります。

くぬ地球（みふし）ぬ上（うぃー）から　有（あ）る丈（うっさ）ぬ戦争（いくさ）、無（ねー）らんなすくとぅ。一人一人（ちゅいなーちゅいなー）が　弥勒世（みるくゆー）（平和）願（にが）いる心気（しんち）（心持ち）繋（ちな）じ行（い）ちゅるくとぅ。

Ｌｅｔ　ｕｓ　ｆｒｅｅ　ｔｈｉｓ　ｐｌａｎｅｔ　ｆｒｏｍ　ａｌｌ　ｂａｔｔｌｅｓ　ａｎｄ　ｗａｒｓ／Ｂｙ　ｃｏｎｎｅｃｔｉｎｇ　ｔｈｅ　ｈｅａｒｔｓ　ｏｆ　ａｌｌ　ｔｈｏｓｅ　ｗｈｏ　ｗｉｓｈ　ｆｏｒ　ｐｅａｃｅ

犠牲になられた全てのみ霊（たま）に心から哀悼の誠を捧げるとともに、沖縄戦の実相と教訓を次世代に伝え続け、人類社会の平和と安寧を願い、「安全・安心で幸福が実感できる島」を目指し、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

２，「平和の詩」

朝日新聞デジタル版2021/06/23

宮古島市立西辺中学２年の上原美春さん（１３）が朗読した。
タイトルは「みるく世（ゆ）の謳（うた）」。

中学２年の上原さんは、「暗黒の過去」を見つめつつ、命をつなぐ大切さを言葉にした。

小さい時から、祖父が三線（さんしん）を奏で、地元の民謡を聞かせてくれた。好きな歌の一節が、詩で引用した「みるく世（弥勒世＝平和な世）ぬなうらば世や直れ」

７６年前も、人々の心にあっただろう、それぞれの大好きな歌。それが「つらさを乗り越えるパワーになっていたかもしれない」と思いをめぐらし、「平和な世」を多くの人に届けたいと、詩にこめた。

この季節に満開を迎える月桃。変わらない景色がある一方、今の日常が当たり前でない時期があったことに気づいた。一昨年、めいが生まれ、命について考えた。子守をして、笑

える幸せが、いまある。「今を生きる私たちでみるく世をつくろう」。沖縄戦を忘れず未来に伝えつなぐことが、自分の役目だと感じている。

みるく世（ゆ）の謳（うた）

初めて命の芽吹きを見た。
生まれたばかりの姪（めい）は
小さな胸を上下させ
手足を一生懸命に動かし
瞳に湖を閉じ込めて
「おなかすいたよ」
「オムツを替えて」と
力一杯、声の限りに訴える

大きな泣き声をそっと抱き寄せられる今日は、
平和だと思う。
赤ちゃんの泣き声を
愛（いと）おしく思える今日は
穏やかであると思う。

その可愛らしい重みを胸に抱き、
６月の蒼天（そうてん）を仰いだ時
一面の青を分断するセスナにのって
私の思いは
７６年の時を超えていく

この空はきっと覚えている
母の子守唄が空襲警報に消された出来事を
灯（とも）されたばかりの命が消されていく瞬間を

吹き抜けるこの風は覚えている
うちなーぐちを取り上げられた沖縄を
自らに混じった鉄の匂いを

踏みしめるこの土は覚えている
まだ幼さの残る手に、銃を握らされた少年がいた事を
おかえりを聞くことなく散った父の最後の叫びを

私は知っている
礎（いしじ）を撫（な）でる皺（しわ）の手が
何度も拭ってきた涙

あなたは知っている
あれは現実だったこと
煌（きら）びやかなサンゴ礁の底に
深く沈められつつある
悲しみが存在することを

凜（りん）と立つガジュマルが言う
忘れるな、本当にあったのだ
暗くしめった壕（ごう）の中が
憎しみで満たされた日が
本当にあったのだ
漆黒の空
屍（しかばね）を避けて逃げた日が
本当にあったのだ
血色の海
いくつもの生きるべき命の
大きな鼓動が
岩を打つ波にかき消され
万歳と投げ打たれた日が
本当にあったのだと

６月を彩る月桃が揺蕩（たゆた）う
忘れないで、犠牲になっていい命など
あって良かったはずがない事を
忘れないで、壊すのは、簡単だという事を
もろく、危うく、だからこそ守るべき
この暮らしを

忘れないで
誰もが平和を祈っていた事を
どうか忘れないで
生きることの喜び
あなたは生かされているのよと

いま摩文仁の丘に立ち
私は歌いたい
澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ
今日生きている喜びを震える声帯に感じて
決意の声高らかに

みるく世ぬなうらば世や直れ

平和な世界は私たちがつくるのだ

共に立つあなたに
感じて欲しい
滾（たぎ）る血潮に流れる先人の想（おも）い

共に立つあなたと
歌いたい
蒼穹（そうきゅう）へ響く癒（いや）しの歌
そよぐ島風にのせて
歌いたい
平和な未来へ届く魂の歌

私たちは忘れないこと
あの日の出来事を伝え続けること
繰り返さないこと
命の限り生きること
決意の歌を
歌いたい

いま摩文仁の丘に立ち
あの真太陽まで届けと祈る
みるく世ぬなうらば世や直れ
平和な世がやってくる
この世はきっと良くなっていくと
繋（つな）がれ続けてきたバトン
素晴らしい未来へと
信じ手渡されたバトン
生きとし生けるすべての尊い命のバトン

今、私たちの中にある

暗黒の過去を溶かすことなく
あの過ちに再び身を投じることなく
繋ぎ続けたい

みるく世を創るのはここにいるわたし達だ

パリ通信・第114号
パリ市庁舎「シモーヌ・ヴェイユ回顧展」

パリの近況・ワクチンの効果

集団ワクチン接種が予定より早く進むフランスでは、本日15日から12〜17歳未成年者への接種が始まった。強制ではなく希望者のみで両親二人の合意書が必須、接種会場には最低片親が同伴することが条件だ。未成年がコロナウイルス感染により重症化する率は極めて低い。自身の予防というより両親や高齢者、後期高齢者への感染予防、集団免疫力に貢献するのが目的である。事実ワクチン接種効果でフランスの一日感染者は700を下回る劇的な効果が上がっている。9日から夜間外出禁止緩和(23時から翌朝6時)を残すのみでコロナ対策規制がほぼ解除された。

一週間足らずで日常生活の行動範囲が一気に広がった。レストラン、カフェ、シネマ、百貨店、スポーツジムなど長く閉まっていた場所が再開。長かった不自由な拘束から解放され、失った時間を取り戻したい熱気に満ちている。さらに例年にない6月の高温で夏のバカンスへの熱い期待が皆の笑顔に溢れている。

私自身4日ファイザー接種2回目を終了し、外出のストレスから解放され急に忙しくなった一週間を送った。郊外に出かけ、プールに行って、予約は必須だが展覧会も開会、まずは歩いて行けるパリ市庁舎「シモーヌ・ヴェイユ回顧展」を見た。

夜のパリ市庁舎

「シモーヌ・ヴェイユ回顧展」

1927年7月13日ニースの裕福なユダヤ人家庭に生まれたシモーヌ・ジャコブがユダヤ人強制収容所を体験し、フランスに帰還後結婚、出産、ポンピドゥー大統領に認められ、女性初の大臣を努め、人権擁護のシンボルに至った90年の生涯を年代順に紹介した展覧会である。

生年月日 1927年7月13日
出生地 フランス、ニース
没年月日 2017年6月30日（89歳没）

シモーヌは建築家の父アンドレ・ジャコブ(1891-1944)と母イヴォンヌ・スタインメッツ(1900-1945)の間4人兄弟の末子として生まれる。1929年世界恐慌で生活苦を強いられながらも6人家族の平和な幼年時代を過ごしている。第二次世界大戦が勃発しユダヤ人迫害が進むにつれ、シモーヌ・ジャコブはシモーヌ・ジャキエとフランス風の名前で身を隠す。父親の教育方針で優秀な生徒として1944年3月29日バカロレアを取得するが、翌日捕えられる。母、姉と共にアウシュビッツ、次いでベルゲンユダヤ人強制収容所に送られた。1945年3月母親が収容所で亡くなる。17歳のシモーヌは未成年者だが年上に思われ毎日強制労働が続いたと言う。とにかく食べるものがなくていつも空腹だった。ある朝起きたら母が静かに絶えていたと回想している。父親と兄ジャンも別のユダヤ人強制収容所で亡くなっている。1945年4月15日イギリス兵が収容所を解放して戦争が終わることを実感したと述べている。
姉と二人パリに帰還するが両親を失い、経済的な基盤もなく、収容所体験に苦しみながらも弁護士を目指して生きる道を進む。1946年10月バカンス中に知り合ったアントワーヌ・ヴェイユと結婚し、シモーヌ・ヴェイユとなる。直ぐに3人の男子が生まれ1953年までは主婦として子育てに専念した。しかし弁護士になる決意は堅く、1956年司法官となり1964年まで刑務所の改善に務めた。特に女性勾留者の条件改善に力を尽くしたことで知られる。
1974年5月ジャック・シラク政権下、フランス第五共和政初の女性大臣として保険大臣となる。ジスカール大統領時代から禁止されてきた人工中絶を国会答弁で擁護し、女性の権利として法案を通したことは彼女の大きな貢献として今も評価されている。1979年にはヨーロッパ議会の議長職に選出され人権擁護のシンボル的な存在となる。

2001年から2007年までショア記念財団の会長を務め、2017年ユダヤ人強制収容所体験者として90年の生涯を閉じ、パリ5区パンテオンに夫アントワーヌと共に永眠した。

10代に戦争体験をした人は生涯その重荷を背負わなければならないと言うが、まさにその通りの人生だと思う。そしてどんなに辛く悲惨な時にも絶望ではなく生きる喜びを求めた彼女の姿勢は現代の若い女性たちにとっても勇気と強さを教えてくれると感じた。会場に掛けられた9枚の写真に90年の長さを見る思いがした。

（パリ市庁舎。シモーヌ・ヴェイユ回顧展・写真は古賀順子さん撮影）

注記
①哲学者で同名のシモーヌ・ヴェイユ（1909年～1943年）とは別人です。
②ショアー財団
ショアー記憶財団 (Fondation pour la Mémoire de la Shoah) は
第二次世界大戦下のユダヤ系フランス人の没収資産をもとに2000年に設立された。この財団の使命とはホロコーストに関連するあらゆる分野の歴史と研究の支援であり、教育、送信、記憶、連帯とユダヤ文化のプロジェクトを取り上げてきた。

パリ近郊　ケシの花畑・　古賀順子撮影